

接近をしようとするとき、医学史そのものの歴史を批判的に再検討することは、きわめて重要であり、医学史の効用をさらに積極的にする所以であろう。

このような前提にたつて、医学史の歴史を顧るとき、大別して、三つの段階を経ていると思われる。医学人物史、狭義の医学史、そして医学の社会史である。ルネサンスころに始まる医学人物史の方法では、当然、現代医学の問題点とはとらえがたいであろう。一九世紀に起始をもつ、発達史観に立つ、狭義の医学史では、その發展的継承の意志を再確認するためには有効であっても、その批判的再検討の基礎とはなりがたい。やはり医学とそれへの社会的要請と応答のなかでなければ問題は明らかにしえないであろう。

今回は、古い医学史書の中に、いわゆる近代医学の指標とされている、いくつかの事項がどのように扱われているかについて述べることにしたい。

(大阪大学医学部衛生学教室)

医学教育における

医学史資料の評価

寺 畑 喜 朔

本学では第一学年の第一、二両学期にわたり、週一回計二十回の医学序説が必須教科として課せられている。前期は明治中期以前の日本医学史を中心に「医」とは何かを講述し、後期は明治中期から現代医学への発達を各分野に分けて、その概説を教育している。

この課程の中間の夏期休暇には、一つのテーマを提供し、学生各自に調査研究することを課している。過去のテーマはつぎのようである。頭標題は「わが郷土における……」で種痘の始まり、病院の始まり、明治期の医療、ドイツ医学の導入者などで、以上の中から医学史的調査研究が医学教育に如何に成果を得たかについて例示する。

一、江戸における種痘に関する史跡(中村秀一)、中村は自宅(文京区向丘)の近所に長い間開業している木下秀一郎

先生を訪ねて、多くの示唆をえた。彼はカメラを肩に、お玉ヶ池種痘所元標と記念碑の所在を確かめ、ついで伊東玄朴の墓（谷中天龍院）、光林寺の緒方洪庵墓、東京大学医学部附属病院外壁の種痘彫刻、ジェンナー像（上野国立博物館）などの所在を確かめた。そして、種痘がどのように日本に伝来し、普及したかを記述した。彼は木下先生から、この調査研究にあたり「時間をかけて、歩いて確かな資料をうることを、そして事実を記すこと。また協力者に対する感謝の気持ちを忘れないこと」など教場では得られない貴重な教訓を受け、感銘することが出来た。

二、兵庫県氷上郡沼貫村におけるドイツ医学の導入者塚口積太郎先生について（和久晋三、略歴はつぎのとおりである。明治三年六月二十六日生、明治二十五年四月大阪医学校卒業、同年五月大阪緒方病院勤務、同年六月内務省医術開業免状下附、その後朝来郡生野町御料局生野文庁医務局、三菱生野鉱山医務局などで勤務し、明治三十三年九月郷里で開業、大正六年四月より同十三年三月まで氷上郡医師会長、同十三年十二月沼貫村村長に就任。昭和六年四月二十二日死去、六十一歳。塚口家と和久家は縁者関係で彼

はこの機会に積太郎先生に関する事蹟を広く調べることが出来た。提示された資料は、大阪医学校第一大試業の及第証、卒業証、医術開業免状、大阪医学得業士認許証、井上眼科病院講習証、大日本私立衛生会会員章、楠田産科婦人科病院講習修業証、東京顕微鏡院種痘術講習修了証、氷上郡医師会規定（明治四十年）などである。

一方、沼貫村誌などにより当地における伝染病禍の実状を調査し、塚口医師の衛生活動を知ることができた。また、大阪医学校の歴史についても若干の検索を行った。大阪医学校の試業委員の中に金子治郎、菅沼貞吉の名があり、筆者が金子治郎は金沢医学館の卒業で明治二十九年第四高等学校医学部の解剖学教授となったことや菅沼は石川県甲種医学校時代の初代産婦人科学教授（明治十八年～十九年）で金沢から大阪医学校へ転任したことなどを彼に注射した。彼は医学校史について深い関心を示した。また、一連の証状をみて、如何に医学の修業がきびしいかについても十分納得したようである。

氷上郡医師会規定は診察料、薬価、手数料に分けてそれぞれ料金が記されており、当時の物価と対比して施術の評

価を行った。

一般に歴史の講述は容易ではない。しかし、具体的な資料を示しながら、その背景などについて述べれば、その教育効果はきわめて大きい。

(金沢医科大学)

外科の守護聖人サン・コーム について

大村 敏 郎

パリの外科医組合は十三世紀にサン・ルイ王の外科医ジヤン・ピタールの呼びかけによって組織された。本拠のおかれた所がサン・コーム教会であったことから、コレージュ・ド・サン・コームと呼ばれる外科医学校が出来、十八世紀には華々しい活躍をして、王立外科アカデミーに発展し、確固たる外科医の地位を築きあげた。

その名前に使われたサン・コームについてわが国ではあまり知られていないので、どういふ人物なのか紹介すると共に、外科との結びつきの経過にふれてみたい。

サン・コームは単独で取上げられる他に、サン・ダミアンと組み合せて登場することがある。カトリックの暦で見ると、九月二十七日はこの二人の聖人の祝日になっている。この二人は生まれた年ははっきりしないが三世紀のア